

釧路町立別保小学校 フィールド学習 実施内容

《概要》

[日程] 2019年9月4日(水)

[参加者] 5年生児童29名

[講師・案内] 環境省 矢部自然保護官

山本・安田(公益財団法人 北海道環境財団)

[フィールド学習の目的]

- ・水を切り口として湿原を取り巻く環境に触れ、釧路湿原への関心と理解を深める。

[実施プログラムの概要]

9:20 細岡ビジターズラウンジ駐車場到着

9:28 オリエンテーション、遊歩道を通って展望台へ移動

9:45 細岡展望台での湿原景観の観察

10:10 遊歩道を通って釧路湿原駅に移動

10:20 湿原に流れ込む小川、湧き水の観察、湧水量の測定

11:05 腐葉土の透水実験

11:10 細岡ビジターズラウンジ駐車場到着

《実施内容(記録)》

■オリエンテーション(9:28)

○挨拶(環境省 矢部自然保護官)

皆さんが今いる場所は日本で一番広い湿原の釧路湿原の一部分にいる。普段、環境省のレンジャーとして、その湿原を守る仕事をしている。今日は、釧路湿原がどんなところか少しでも知ってもらいたいと思う。わからないところはスタッフに聞いてもらいたい。(スタッフ紹介)



○スケジュールの確認(北海道環境財団 山本)

■2グループに分かれて、フィールド学習(9:30)

※以降は1つのグループの活動を記録

(案内:北海道環境財団 山本)

○遊歩道を通って展望台を目指す

歩いてきた道の左右を見てもらいたい。どちらも斜面になっているので、私たちが歩いているところは、山で言うと尖った場所を歩いている。こ



こに雨が降ると、この道を境にして左右に水が流れていく。その水は地面に染み込み、やがては釧路湿原に流れ込んでいく。こうした丘が湿原の周りを囲んでいて、ここと同じように、遠回りしながらも、やがては湿原に流れていく。

○細岡展望台前の視界が広がった展望地

ここは細岡展望台の1つ前にある展望地。ここからでも湿原や遠くの山々が見渡せる。看板にキラコタン岬、宮島岬と書いてあるが、場所がわかるだろうか。（全員で確認）岬と言うと、どんな場所のことを言うかわかるだろうか。（海にある場所？と子どもたちの声）その通りで、海に突き出た場所を岬と普通は言っている。目の前に海があるわけではないのに、なぜ岬という名前がついているのだろうか。（昔は海だった？と子ども達の声）その通りで、4000年前は目の前に広がる湿原には海が広がっていた。目の前に海が広がっていると想像すると、岬という名前がぴったりにくるように思えるだろうか。



○細岡展望台で湿原景観の観察（お話：矢部保護官）

目の前に見える川が釧路川、その奥に広がっているのが釧路湿原。よく見ると、色が違ったり形が違って見える場所があり、同じ植物が生えているわけではない。数日前に雨が降っていたので、釧路川の周りに水があふれている場所があるのがわかるかと思う。台風で大雨が降った時にも湿原に水があふれて溜まり、ゆっくりと下流に水が流れていくので、洪水になりづらい。このように私たちが洪水から守ってくれる役割も湿原にはある。ここには多くの生き物が住んでいて、皆さんが良く知っているタンチョウも暮らしている。この景色を見に、外国からも多くの人々が訪れる場所になっている。



○釧路湿原駅に向かう途中でミズナラの観察

葉の先をよく見ると、ドングリの赤ちゃんがついているのがわかるだろうか。（皆で確認）皆が知っているドングリとは、色や形が違うと思う。まだ帽子から少し顔をのぞかせているくらいで、これから秋本番に向けて少しずつ大きくなっていく。今は色も緑色で、大きくなってから茶色になっていく。これまでは歩きながら見つけることが



できなかったが、ここは道沿いで光が多く当たるので、ドングリの実がなっているのではないかと思われる。

○竖穴住居跡の観察

森の中の地面を良く見ると、少し地面の形が違う場所があるのがわかるだろうか。地面はどこもササで覆われているが、円くへこんでいる場所がいくつかある。これは何かの跡なのだが、何の跡だかわかるだろうか。実は4000年前に人の家が建っていた跡と言われている。地面を掘ってその上に木などを使って家を建てていた。4000年というと、皆が知っているエジプトのピラミッドが作られた時と同じで、とても昔のことということがわかるかと思う。その跡が今でも残っているということはすごいこと。その理由は、釧路湿原がここにあるのと同じ理由で、この地域は、本州などに比べて夏でも涼しい。そのため、葉っぱなどが分解されにくく、温かい地域であれば葉が分解された土がどんどん溜まっていくが、それが少ないということのようだ。また、この場所に家などが建たずにそのままにされてきたということも、考えてみるとすごいこと。目の前にある地面の形は4000年前からほとんど変わっていないということ。



人が生活していくには、食べ物と水が必要で、先ほど、海が広がっていたとお話したが、この道の下には海が広がっていて、食べ物には困らなかったのかもしれない。水もあったのだと思うが、実は湧き水がこの下から流れ出ている、それをこれから見に行きたいと思う。

○萌芽林の観察

生えている木を見ると、根元から数本の幹が出ている。種から育てると、このようにはならず、根元からは一本の幹が伸びる。このように根本から数本出ているのは、かつて1本の幹だった木が切られたり、折れたりして、根元から新しく出てきた芽が大きくなったから。ここに生えている木はドングリの木が多く、この木は幹を切っても死にづらく、根本から新しい芽が出てきやすい。このため、薪を取るために、この木は昔から利用されてきた。ここにある木もほとんどが根元から数本の幹が出ているということは、薪などに利用されてきた木だということがわかる。さすがに、4000年前から生えていた木はいないだろうが、この林はそうして人に使われてきたということがわかる。



○釧路湿原駅から湿原に流れ込む小川の観察

耳を澄ますと水の音が聞こえるだろうか。丘にふった雨が湧き水となって染み出してきて、小さな小川を作っている。この小川は駅の線路をくぐって、湿原の方に流れ込んでいる。小川の水の通り道には、周りとは違う草が生えているのがわかるだろうか。背丈が高く、先が尖っていて、先ほど展望台から湿原を見たときに緑色に見えた場所に生えている草でヨシと言って、湿原に生えている草。このヨシは、栄養がある土と水が多くあるところが好きなので、この小川の水の通り道の周りにだけ生えている。

これから、この小川をつくっている湧き水が出てくる場所を皆で見に行きたいと思う。

○湧水の観察、湧水量の測定

小川を遡り、泥炭と泥が混じった場所を通過して山際の湧き水が出ている場所まで移動する。岩の割れ目からとぎれなく流れ出ており、冬も凍らない。この水はどのくらいの量が出ているのか、10秒間ビニール袋に水を溜め、後程、水の量を測ってみたい。

水を取った時間は、ほんの10秒程度なのでこのくらいと思うかもしれないが、この量が24時間ずっと出続けているということ考えると、とんでもない水の量になる。今の私たちが生活で使う水の量でも何家族も生活でき、昔の人は使う水の量は今ほどではなかったもので、何十家族もこのくらいの水で生活することができたと考えられる。

○腐葉土の透水実験

先ほど湧き水を観察し、絶え間なく出ているということは、人が生活できる程の量になるということをお話した。この水は森に降った雨が地面に染み込



んで、ゆっくりゆっくりと地面の下を通過して、やがては湧き水として出てくる。ここでは、森の土がどのくらい水を染み込むのかという実験を行う。隙間がないように地面に透明の筒をぴったりと付け、透明の筒に水を入れると、その水はどのようなになるのかを見てみたい。（林道の土、道の脇にある腐葉土でそれぞれ実験する。林道の土は、ほとんど染み込まない。筒を外すと、水は道の上を流れながら徐々に染み込んでいく。腐葉土では、すぐに筒の水はなくなり、地面に吸い込まれる）



湿原には水はなくてはならないもので、その水は先ほど見たような湧き水が集まった小さな流れで支えられている。その湧き水は、森に降った雨が地面に染み込み、ゆっくりゆっくりと土の中で水を通すので、水は枯れない。この森の土は、森の落ち葉、生き物によって作られており、森があることで、ふかふかの土ができる。つまり、湿原と森はとても関係が深く、湿原を守っていくには森を守っていくことが大切ということ。

■細岡ビジターズラウンジ駐車場到着・フィールド学習終了（11：10）